

# ブントの革命的再生を

游 権

反スタ・トロツキズムを清算し、急進民主主義を克服し、労働者大衆と結びつく

## 革命党の「正規の攻囲」を建設せよ

7.2 三里塚現地に15,000人 (報告5面)

三里塚闘争は、昨年の四日間戦闘をその号砲として、労働者の憤激と結合した階級的流動を形成し、その奔流は、三・二六闘争の画時代的和平を切り拓いた。

三・二六以降五・一〇決戦へと登りつめた労働者・農民の闘争は、今日「革命的高揚の第二期」に入っている。この三里塚闘争を駆動力とした日本階級闘争の発展は、明確に世界史的な、史上三度目の戦争と革命の時代の反映であり、それと密接に結びついたものである。

米ソ二大超大国は、霸権争奪を強めており、アフリカで、アジアで、中東でと、その角逐は一層、激化している。ソシ帝は、全世界的規模での反帝反植民地闘争に対して、その統合をはかるのではなく、逆に分断をもちこみ、自らの霸権をもちこみ、自らの霸権を確立するためのみ奔走し、この反帝反植民地闘争をねじまげ抑えつけようとしているのだ。たとえば、アフガニスタンや北イエメンでの「親ソ」クーデターが、ソシ帝の霸権主義的野望にもとづくものであることは明らかである。このソシ帝の攻撃は、反帝反植民地闘争を担っている人民の闘い

共産主義者同盟政治機関紙

第45・46合併号

1978.8.5

定価 200円

晋社 沢擊 游便 千私 東京0-195783  
人所 行連 箱4 蔡書 東京0-195783  
行發 連替 10回2000円(開封・送料共)  
振替 2500円(密封・送料共)

☆ 帝国主義心臓部にプロレタリアート  
革命の最前線へ!  
転化せよ!  
★ 帝国主義心臓部にプロレタリアート  
の総蜂起を!

内容

月

今

学習欄

レーニン「社会民主党の二つの戦

問題

I

備

卷頭論文

急進民主主義を止揚し、ブント

の革命的再生を

南朝鮮階級闘争の激化と新たな転回軸 II

「共産主義と労働運動の結合」における戦術

II

南北自主統一

南北分断固定化

を策動し、南朝鮮侵略

の反米、反日、反朴闘争は一大高揚をむかえん

とする「南北自主統一」「南北分断固定化」粉碎

の反米、反日、反朴闘争は一大高揚をむかえん

としている。

このようなかで華國鋒主席の朝鮮民主主義人

民共和国訪問、金日成主席との会談は、米帝お

よび日帝、そして朴軍事独裁政権による「南北

分断固定化」の策動を粉碎し、南朝鮮人民によ

る「南北自主統一」の闘いを支持するという重

大な任務のほかに、相互の社会主義国と人民が

プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の旗

じるしを高くかげ、第三世界人民、特にアジ

ヒロゲ、また、非同盟運動などの世界革命勢力

を切り崩すため、狡猾な陰謀活動をくりひろげ

ています。(金日成演説と指摘し、この支配主

義勢力こそ、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ

に立脚点をもたらし、「反帝民族解放闘争」

の分裂、切り崩し、争奪を陰謀する霸権主義勢

力を暴露している。われわれは、この中朝人民

の帝国主義、霸権主義と対決する共同の闘いを

支え、連帯しなければならない。

今や、朝鮮をめぐる情勢は緊迫している。

共に立脚点をもたらし、「反帝民族解放闘争」

の闘いの結合、それに敵

アの人民の反帝民族解放闘争の大後方として、

帝国主義と社會主義の霸権争奪と対決する

という姿勢をさし示したのである。

今や、朝鮮をめぐる情勢は緊迫している。

共和国の社会主義継続革命と南朝鮮人民の「民

主回復」「南北自主統一」の闘いの結合、それに敵

アに霸をとなんとするソシ帝の攻撃がある。

反革命戦争を準備する日・米帝、そして朴軍

事独裁政権の米日「韓」臨戦体制攻撃の強化、そ

してまた「クロス承認」の策動を追認し「二つ

の朝鮮」に加担し「アジア安保」

によってアジ

アに霸をとなんとするソシ帝の攻撃がある。

このようないつもえの闘いに、われわれは

いかに対処すべきなのか。

日本の労働者階級人民は、共和国の社会主義

継続革命と南朝鮮人民の決起を断固として支持

の朝鮮」に加担し「アジア安保」

によってアジ

アに霸をとなんとするソシ帝の攻撃がある。

反革命戦争を内戦に転化し、プロ独立、社会主義

革命をめざして闘わなければならぬ。

そして日帝の朝鮮侵略

対しなければならない。そして日帝の朝鮮侵略

反革命戦争を内戦に転化し、プロ独立、社会主義

革命をめざして闘わなければならぬ。

そして日帝の朝鮮侵略

</div



唯物史観・資本主義批判・  
帝国主義批判

この点をふまえ、労働者多数の獲得の問題として、党の労働運動に対する戦術を検討するならば、労働運動と共産主義の結合の観点のもとに、帝国主義の腐朽性、寄生性の証明である日和見主義者、修正主義者との闘いへと革命的労働者を動員していくこと、しかしそれだけでは不十分であり、この革命的労働者の闘いを基礎に、労働者階級全体を支配階級へと高めあげる闘いへ結合させることに全力をつくすこと、これが要である。

さらに、このことを帝国主義批判の問題として再把握するならば、帝国主義の性格を寄生的な資本主義、あるいは腐朽しつつある資本主義としてとらえると同時に、過渡的な資本主義として、換言すれば死滅しつつある資本主義としてとらえることの重要性である。

それでは、死滅しつつある資本主義とは何を意味するのか。マルクスは「資本論」第二四章本源的蓄積で、唯物史観を前面に打ち出し、プロレタリアートの歴史的使命、すなわち、その生成と蓄積、それが社会の主人公となる必然性を明らかにしている。それは、マルクスが「死滅しつつある資本主義」を次のように規定しているのを見れば明らかである。

「少数の資本家による多数の資本家の収奪と手を携えてますます大きくなる規模で労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的応用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段の転化、結合的社會労働の生産手段としての使用によるすべての節約、世界市場の網のなかへの世界各国の組み入れが發展し、したがつて資本主義体制の國際的性格が發展する。この転化過程のいつさいの利益を横領し、独占する大資本家の絶えず減つっていくにつれて貧困、抑圧、隸属、墮落、搾取は、ますます増大していくが、しかしまた、絶えず膨脹しながら資本主義生産いく。資本独占はそれとともに開花し、そのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それが資本主義的な外被とは調和できなくなる一点に到達する。そ

# 唯物史觀・資本主義批判 帝国主義批判

この点をふまえ、労働者多数の獲得の問題として、党的労働運動に対する戦術を検討するならば、労働運動と共産主義の結合の観点のもとに、帝国主義の腐朽性、寄生性の証明である日和見主義者、修正主義者との闘いへと革命的労働者を動員していくこと、しかしそれだけでは不十分であり、この革命的労働者の闘いを基礎に、労働者階級全体を支配階級へと高めあげる闘いへ結合させることに全力をつくすこと、これが要である。

さらに、このことを帝国主義批判の問題とし

従来の発展的要素を単に自然発生性にゆだねるならば、それは新しい発展を阻害する保守的な要素に陥る、という弁証法的関係をつかみとることこそが重要である。このことを把握するか否かが、反スタートロツキズムの思想潮流を止揚しうるか否かの分水嶺を形成する。

「こで外被は爆破される。収奪者が収奪される。資本主義的私有の最後の鐘がなる」こうして外被は破碎され、これまでの被掠取者が収奪者を収奪する。資本主義的私有、すなわち、私有一般が否定され、社会的所有にとってかわられるのである。こうしたいつきの過程を資本蓄積の歴史的傾向として資本主義生産がはらんでいるのである。

資本主義生産は資本家に対する労働者の経済的隸属を増大させながら、また他方で労働の社会化によって、「絶えず膨張しながら資本主義生産過程そのものの機構によつて訓練され組織される労働者階級」をつくり出す。ブルジョアジーはなによりも、自分自身の墓掘人を生産する（共産党宣言）という意味が、ここにある。

ら社会主義へ移行するための客観的基礎、すな  
わち、そのための物質的生産力をつくりだすと  
同時に、そのための主体的基礎である近代的ア  
ロレタリアート、労働者階級をつくりだすとい  
う事実である。

レーニンは、この命題を党建設上の組織問題  
をめぐる論戦の中で、「労働者の規律」問題とし  
て次のように展開している。

「ある人に脅しの道具としてしかみえない工場  
こそ、まさにプロレタリアートを結合し、訓練  
し、組織を教え、彼らをその他すべての勤労、  
被擄取人民層の先頭に立たせた資本主義的協業  
の最高形態である。資本主義によつて訓練され  
たプロレタリアートのイデオロギーとしてのマ  
ルクス主義こそ、浮動的なインテリゲンツィア  
に、工場がそなえている擄取者の面（餓死の恐  
怖にもとづく規律）と、その組織者の側面（技  
術的に高度に発展した生産の諸条件によつて結  
合された共同労働にもとづく規律）との相違を  
教えたし、いまも教えている」（一步前進、二歩  
後退）

このマルクスそしてレーニンが提示した命題  
こそ、プロレタリア階級に基礎をもち、プロレ  
タリアートを準備する革命党の綱領にとつて最も  
根源的なものなのである。

すなわち帝国主義の腐朽性との闘いは労働者  
階級をプロレタリアートとして、いかに社会主  
義に向けて組織していくかの問題を基礎にして  
初めて解明されるのである。そしてこうした社  
会主義に向けた改造が労働者階級の多数を獲得  
しなければ成しえないことは、もはや自明であ  
る。

階級闘争の激成に立脚し、論戦を深め  
ブント総括を共通の事業とせよ

れは反スタロツキズムの「危機」——帝国主義批判の一面性を根底から突き崩しているのである。そして、こうした事実こそ、われわれがプロントとして自らの綱括を反スタロツキズムを清算し、「党的転換」をなし切る核心点であるのだ。

レーニンは「第一インター・ナショナルの崩壊」で「革命的情勢の徵候」を要約した上で次のように述べている。「……およよ革命的情勢があればかならず革命がおこるというわけのものではなく、ただ次のような情勢からだけ、すなわち、右に列挙したような客観的変化に主体的変化が結びつくばあい、つまり旧来の政府を粉碎するに足る強力な革命的大衆行動をおこす革命的階級の能力が結びつく場合にだけ、おこるものだからである。」第二インターの激烈な論戦の中で提起されたレーニンのこの分析は「客觀的變化」に「主体的變化」が結びつくこと、言いいかえれば革命的情勢とプロレタリアートを指導階級に高める黨の指導とを結合することが不可避であることを明らかにしている。今日の革命的情勢の端緒に応え切る「党的転換」を獲得するにあたっては、レーニンのこの提起を十分に銘記する必要がある。

この矛盾を労働者階級、労苦被搾取大衆への強搾取、強収奪へ転化せんとすればするほど、貧困、抑圧、隸属、墮落、搾取は、ますます増大していく、労働者階級の反抗もまた強大になつていくという社会主義革命の前夜を準備するのだ。それは、また三里塚闘争の労農学の団結、その一三年にわたる発展が、反対同盟農民の持続した粘り強い闘いに多大な根柢を有しつつ、他方、労働者の憤激が広範に存在し、その反抗が大きな力を形成し、それと結合することによつて三里塚闘争を今日の日本階級闘争の管制高地へと押し上げている事実にも明らかである。

この三里塚闘争へのむきだしの破壊攻撃に対して反撃を準備し、百日間戦闘を攻勢的にかちとつていかなければならぬ。それはまた、広範に形成されている労働者の憤激、その個々分散的決起を、プロ独・社会主義へと結合させる、党の労働運動に対する戦術の駆使によつて、より一層勝利的なものになるのである。

日帝は、労働者人民への強奪・強搾取攻撃を強めると軌を一にして、南朝鮮への侵略反革階級独裁の危機的動搖の中で、社帝派、社会排



## 7・2 弹圧に抗し、闘う15,000の隊列

れば反スタロツキズムの「危機」——』『帝国主義批判の一面性を根底から突き崩しているのである。そして、こうした事実こそ、われわれがゾントとして自らの総括を反スタロツキズムで清算し、「党の転換」をなし切る核心点であるのだ。

レーニンは『第一インター・ナショナルの崩壊』で「革命的情勢の徵候」を要約した上で次のふうに述べている。「……およそ革命的情勢がござればかならず革命がおこるというわけのものではなく、ただ次のように情勢からだけ、すなち、右に列挙したような客観的変化に主体的的变化が結びつくべきである。つまり旧来の政府を粉砕するに足る強力な革命的大衆行動をおこす革命的階級の能力が結びつく場合にだけ、おこることのだからである。」第一インターの激烈な革命戦の中で提起されたレーニンのこの分析は、客観的変化に「主体的変化」が結びつくこと、言いいかえれば革命的情勢とプロレタリアートと指導階級による中間主義的態度を結合することなどが不可避であることを明らかにしている。今日の革命的情勢の端緒に応え切る「党の転換」を獲得するにあたっては、レーニンのこの提起を十分に銘記する必要がある。

だが多くの諸君は、いまだに反スタロツキズムを止揚する契機をつかみきれず、それを温存し固定している。こうした彼らの中間主義的態度は、ブントの党的敗北の根柢をあいまいにして、現実の直視、現実からの出発といつマルクス主義の態度を放棄したものであり、これではまた転化させなければならない。そのためにはわれわれの内部で育くまれてきた反スタロツキズム、急進民主主義を粉碎し、それを止揚する闘いを党建設にしっかりと結びつけ、その成果をもつて反スタロツキズムの過渡期論、ソ連論における中間主義を粉碎し、毛沢東思想に対する反スタロツキズム、急進民主主義を摘出し、それを止揚する闘いを党建設にしつかりと結びつけ、そのためにはまた転化させなければならない。そのためにはブントの革命的再生を担うことはできない。

またこのような全体の潮流に抗し切れず、ブントを右翼的に清算する部分が生み出されていなければならない。

昨春三里塚四日闘闘をその烽火とし、今春夏戦を一大マルクマールとして、革命的高揚の第一期に踏みこんだいま、激成する労働者の憤激の細流を統合し、勤労被搾取大衆の闘いをも込みこむために、党建設の根幹である綱領思想に対する態度を、ブント総括にひきつけて確立し、非合法中央集権のプロレタリア单一党の獲得に向けて進まなければならぬ。

この史上三度目の戦争と革命の時代において

ノイギアの各議論も、その生命力と成功の保障は、プロレタリアート独裁によるものでもない。この革命的暴力の源泉があり、避けることの勝利の保障がある」（偉大な創内実と社会主義の首尾一貫した労働組織を代表して実現しているここにこそ核心がある。ここに力の源泉があり、避けることの勝利の保障がある」（偉大な創内実と社会主義の首尾一貫した労働者階級人民を支配階級へと変革せねばならない。

それは同時に、帝国主義の擁する勤労被搾取大衆の闘いと、帝国主義批判の小ブル性や自然権へと指導し、領導していく社会基礎を打ち固めるものである。

われわれは、以上の観点のもつて、この大方向——①アントの清潔感の力量を注ぎこんでいかなければ、キズムの清算、急進民主主義の思想を正しく評価する——に階級実践のなかで苦難する共産主義をもよびかけ、プロレタリア革命事業に向けて協力していく必要がある。田高不況に示された矛盾を激成し、その矛盾を解くに、革命的労働者人民の突出港」強行に見られるように、強制的労働者人民の頭上へ反革命としてきている。それは明らかに危機の表現であり、「出」なき吐港」に見られるように、強制的労働者人民の頭上へ反革命である。「田高不況」に示された矛盾を激成し、その矛盾を解くに、革命的労働者人民の突出

全ての共産主義者は  
団結せよ

この矛盾を労働者階級、勤労被搾取大衆への強搾取、強収奪へ転化せんとすればするほど、貧困、抑圧、隸属、墮落、搾取は、ますます増大していく。労働者階級の反抗もまた強大になつていくという社会主義革命の前夜を準備するのだ。それは、また三里塚闘争の学農學の団結、他方、労働者の憤激が広範に存在し、その反抗が大きな力を形成し、それと結合することによつて三里塚闘争を今日の日本階級闘争の管制高地へと押し上げている事実にも明らかである。

この三里塚闘争へのむきだしの破壊攻撃にして反撃を準備し、百日間戦闘を攻勢的にかちとつていかなければならぬ。それはまた、広範に形成されている労働者の憤激、その個々分散的決起を、プロ独・社会主義へと結合させる党の労働運動に対する戦術の駆使によつて、より一層勝利的なものになるのである。

日帝は、労働者人民への強収奪・強搾取攻撃を強めると軌を一にして、南朝鮮への侵略反革命戦争を準備し、おしすすめている。さらにこの日帝の侵略反革命戦争の策動は、ブルジョア階級独裁の危機的動揺の中で、社帝派・社会排外主義を「拳国一致」のもとに動員することを意図しているのだ。

この間の「日韓大陸棚協定」の強行採決、そして「日韓台は運命共同体である」という金丸発言、自衛隊統合幕僚、栗栖の「有事における自衛隊の出動」を引き金とした「有事防衛法」の論議も、実は、朝鮮侵略反革命戦争の準備に他ならない。

われわれは、日帝の労働者階級人民に対する攻撃に対して、反帝民族解放闘争を闘う全世界の人民、とりわけプロ独を堅持した社会主義継続革命を闘っている中国人民を先頭としたアジア人民と連帯し、マルクス・レーニン主義に基づいた非合法中央集権党を建設しなければならない。われわれの新しい闘いの第一歩は、いま印されたばかりである。全国の闘う共産主義者は今こそ團結し、日本人の未来を代表するプロレタリア党の旗のもとに結集しよう。われわれの提起したプロントの革命的再生の基盤は、今日の労働者階級の闘いにおいて最も切実に要求されているものに他ならない。プロントの総括作業は、分派以降の各々の道筋において一つ一つ独自に検証され、総括されなければならない。

第一次プロントの部分性を突破する、独自の党批判・反批判、自己批判・團結の作風を堅持し、清算主義を排し、労働者階級の大半に依拠し、ともに前進するのでなければならない。われわれの前途は明るい。プロ独・社会主義の大道、日本社会主義革命のために、すべての共産主義者は團結し、共に前進しよう。









